

講座名（専門科目名）	皮膚科学	教授氏名	片山一朗
学生への指導方針	学生の希望を重視し、臨床に還元できる研究テーマと指導教官を決める。		
学生に対する要望	基礎領域の教室との共同研究を推進する。大学院修了後は積極的に海外留学する。		
問合せ先	(Tel) 06-6879-3031 (Email) h-murota@derma.med.osaka-u.ac.jp	担当者	室田浩之
その他出願にあたっての注意事項等			

(以下教室紹介)

大阪大学皮膚科学教室は1903年（明治36年）に櫻根孝之進先生が初代教授として「皮華科」の名称で開設されました。2004年、現在の片山一朗が着任し、脈々と続く大阪大学皮膚科学教室の歴史を引き継ぎ、免疫・アレルギーをキーワードとした難治性皮膚疾患の創薬研究を展開しています。日常診療で患者さんから得られる疑問点を解決する、現時点の医療知識、技術、医療機器で解決できない病態の治療法を創出するための研究を行い、Sick patientを治す姿勢をモットーに日夜、診療、教育、研究に取り組んでおります。医学部研究棟10階にある皮膚科学教室の医局からは万博記念公園と大阪市が一望できます。景色の中でひととき目立つ万博記念公園のシンボル、「太陽の塔」は透徹した、しかし慈愛に満ちた大きな眼で未来を見すえています。そんな「太陽の塔」とともに、ここ千里の丘から世界に情報を発信し、教室員が一丸となって新しい時代の皮膚科学を創りだすことを目標としています。皮膚は精緻な恒常性維持機構を持ち、その破綻が多様な皮膚疾患の原因や悪化因子となります。表皮細胞は生体の最外層でのストレス侵襲に対する非常に精緻なセンサー機能を持ち、恒常性維持のための生体応答が進行します。その中で、新たな皮膚の機能として表皮細胞が皮膚という末梢組織で自律的にコルチゾールを活性化する機能を有していることを明らかにしました。また発汗現象を3次元画像でイメージングすることで発汗に影響を与える因子の解析を進行させています。最近、暖まると皮膚が痒くなる機序として、アーテミンとよばれる神経成長因子が関与することを報告しました。また白斑の病態研究を推進しており、自己免疫機序の関与やオートファジーの関わりを検討しています。結節性硬化症は多彩な皮膚症状、肺、腎、中枢神経などの腫瘍が見られますが、m-TOR阻害薬が症状の改善に効果的である事を見出し、創薬開発に関する大型プロジェクトがスタートしています。